

# 奇賊悲願

烏啼天駆シリーズ・3

海野十三

青空文庫



## 義弟の出獄

烏啼うていてんく天駆といえ、近頃有名になつた奇賊であるが、いつも彼  
 を刑務所へ送り込もうと全身汗をかいて奔走ほんそうしている名探偵の  
 袋猫ふくろびょうびょう々々の何時果てるともなき一騎討ちは、今もなお酣たけなわ  
 あつた。

その満々たる自信家の烏啼天駆が、こんどばかりは困り果てて  
 しまった。散歩者の胸の中から心臓を掬すり盗とる技術も持っている  
 し、一夜のうちに時計台を攫さらつていつてしまふ特技もある怪賊烏

啼にとつて、天下に困ることは一つもない筈だったが、こんどというこんどばかりは、彼は大困りに困り果ててしまったのである。そのわけは、彼の只一人の愛すべき、義弟が、満期になって刑務所から出て来たことだった。

刑務所から晴れて出て来たんだから、まことに結構なわけで、困る事なんかすこしもない筈だが、かれ烏啼は大いに困り果てるのだった、というのはこの義弟的まどやかんいち矢貫一なる青年は一に二を足して三になったほどの非常に単純な男であつた。その上に彼はピストルを発射することがたいへん好きであつて、もし何人か何十人かがピストルを持っていて彼もその中に交つていたとしたら、誰れよりも真先にピストルの引金をひくのは彼的矢貫一に違いな

かった。なおその上に、彼の射撃たるや千発千中どころか万発万中という完璧な命中率を保持していることであつた。

さような次第だから、的矢貫一が出獄し、当節の一から百まで腹立たしい世間へ顔を出したとなると、単純な彼を怒らせる機会はいくらでも転がっていて、ぱぱんぱぱんと直ぐさまピストルから煙を出すようになることは必至である——と、義兄烏啼天駆は推測しているのである。

ピストルから弾丸をくりだせば、当今どういふことになるか、恐ろしい結末になることは知れていた。それに奇賊烏啼としては、ピストルを放つて相手の命を取りつ放しにしたり、重傷を負わせて溝の中に叩きこんで知らぬ顔をしたりするのは、極めて彼の趣

味と信条に反する唾棄<sup>だき</sup>すべき事柄であつた。そんなことがあれば、烏啼はふだん何とかかんとかいつて紳士ぶつてゐるが、彼奴の弟は人間にあるまじききたないことをやつてゐるじゃないかと、世間から後<sup>うしろゆび</sup>指<sup>ゆび</sup>を指されるのが、今から予想するだに烏啼にはたまらない厭<sup>いや</sup>なことだつた。

さりとして、この義弟を掴<sup>つか</sup>まえて、ピストルを発射するな、弾丸を人様に命中させるなど強<sup>こわ</sup>意<sup>い</sup>見<sup>けん</sup>を加えても、それは蛙<sup>つら</sup>の面に小便、鰐<sup>わい</sup>の面に水のたぐいであつて、とても義弟の行状を改めさせる効力のないことは、それを試みるまでもなく分つてゐる。

こういう次第だから、烏啼天驅の懊<sup>おう</sup>惱<sup>のう</sup>するの<sup>のも</sup>尤<sup>も</sup>もであつた。そして彼は次第に食欲を減じ、女人をして惚<sup>ほ</sup>々<sup>れ</sup>させないではい

ない有名なる巨軀きよくこう紅肉が棒鱈ぼうだらのように乾枯ひからびて行くように感ぜられるに至ったので、遂に彼は一大決心をして、従来の面子めんつを捨て、忍ぶべからざるを忍び、面つらの皮を千枚張りにして、彼が永い間ひそかに尊敬している心友の許へ出掛けて行き、すべてをぶちまけて、よい智慧の貸与とその協力とを乞うたのであった。「それは同情する。君としちやあ、このまま放置するには忍びないだろう。パチンコの的矢と来ては、返事をする代りにピストルの弾丸を送る奴だからねえ。わしも彼奴に前後三回、身体に穴をあけられたよ」

「どうも済まん。それをいわれると、おれは胸を締められる想いだ。ねえ、何とかして貰えんだらうか。一生のお願いだ。哀れな

る烏啼天駟を助けてくれ」

「うん。外ならぬ貴公からは是非にと頼まれたのは前代未聞じゃから、何とかしてあげたいものだ。どうするかね、これは……」

烏啼の心友は、ひどい猫背を一層丸くしてしばらくじっと考えこんでいたが、やがて彼は黒眼鏡の奥に、かっと両眼を開き、両手をぽんと打った。

「よし、いいことを思いついた。それを思いついたは、貴公の幸運というものじゃ。こういうことで行こう。近う寄れ」

そこでかの心友は猫背を一層丸くして、烏啼の耳に何事かを囁ささやいたのであった。

「えっ、彼奴にピストルを持たせて……ふんふん、ええっ、やつ

ちまうのか。それでは虎を野へ放つようなもの……え、大丈夫か。ふんふん、ふうん。……そうかなあ。いや君を信ずるよ、僕は。よろしい、どうか頼む」

烏啼は、手を合わせて心友を拜んだ。

### お志<sup>しま</sup>方は二十二

烏啼の本<sup>ほん</sup>塞<sup>さい</sup>の奥の間で、夕飯の膳が出ていた。烏啼天<sup>てん</sup>駆と、問題の義弟の的矢貫一と、そしてかねて烏啼が的矢<sup>めあ</sup>に娶<sup>めあ</sup>わせたい

と思つてゐる養女のお志万と、この三人だけの水入らずの夕餉ゆうげだつた。

お志万は丸ぼちちやの色白の娘で和服好み、襟えりもと二元はかたくしめてゐるが、奥から覗のぞく赤い半襟がよく似合う。お志万は天駆と貫一へのお酌に忙しい。

「おい貫一。こんどはお前も自ら責任をとつて万事をやれよ」

「はい、はい」

「責任ある生活を始めるには、何といつてもまず身を固めにやらねえ。結論をいえば、お志万と結婚し新家庭を作れやい」

「いや、それは御免ごめんを蒙こうむりましょう」

「御免を蒙る。なぜだ。可哀想にお志万は、お前の出獄するのを

指折りかぞえて待つていたんだぜ」

「それはどうも済みません、だが、兄貴の言葉にや従いかねる」

「お前はお志万が嫌いかい。はつきり返事をしなさい」

「お志万さんだけじゃねえ、僕は、およそ女と名のつくものが好きになれないんだ」

「ぷッ」烏啼はふきだした。「冗談も休み休みにいえ。若い男の癖に、女が嫌いなどと……」

「性に合わないから合わないというんですよ。お志万さん、御免よ、ね」

お志万は下俯したうつむ向き、前垂まえだれをぎりぎりうなずと噛んで、二三度肯うなずいてみせる。その白い襟元の美しさに烏啼は目をやって、貫一の奴

はどこかに欠陥があるのかなと思つた。

「さあ、ここらで飯にしよう」

と、貫一は茶碗をお志万の方へ差出した。

貫一は、軽く二杯をかきこむと、急いで席を立とうとした。

「待て、貫一」

と烏啼は手をあげて停めた。

「僕は約束があるんだ。だから……」

「約束なんかないよ。ごま化かすない。それよりも、おれはお前に  
いいつけることがある、さ、もう一度座りなよ」

「お志万さんのことなら、何度いっても駄目だ」

「そのことじゃねえ。商売のことさ。出獄したところでお前に一

つ腕前を奮つて貰わなくちや、烏啼天駆の弟そうろうで候のといつても、若い奴らが承知しねえ。かねておれが用意しておいた大仕事があるんだ。お前は仕事始めに、それをやるんで。その代り骨が折れるぜ」

烏啼の声がだんだん、毒味を加えた。

「へえ……」

貫一は目をぱちくり。

「お前、胆きもつ玉は大丈夫だろうね」

「兄貴は本気でものをいつているのかね」

「なにを寝ぼけてやがる。——どじを踏んでみる。皆から洩はなもひつかけられねえぜ。お前の腕は確かだろうね。焼きが廻まわっている

んじやないか」

「はばか憚りながら……」と貫一は、とうとう座り直して真剣な目付になつた。

「憚りながら的矢の貫一、胆玉がよわくなつたの、腕があまくなつたのといわれちゃあ——」

「そんならいい。今夜から仕事に行つてくれ。お前ひとりでやるんだぜ、五体揃えば、五百万両の仕事だ」

「五百万両。それなら仕事の返り初日にはちようど手頃のものだ。一体それはどこへ行つて貰つてくるんで……」

「本当にやる気があるのかい。臆おしけ気をふるつているんなら、『まあ見合わせましょう』というがいいぜ。今が最後のチャンスだ」

烏啼は念入りに義弟に油をかける、そういわれては貫一たるもの、何がどうあつても兄貴からいいつけられた仕事をやってみせないでは済まなくなつた。

「兄貴、今からでも出かけますぜ」

と、貫一は胸へ手を突込むと、愛用のピストルをつかみ出して、畳の上へ置いた。

烏啼は、その方をちよつと睨にらんだだけで素知らぬ顔で話をすすめる。

「貫一。この仕事はお寺さまから仏像を盗みだすんだ」

「えっ、仏像を……」

「仏像といつても、けちなものじゃない。いずれ準国宝級のもの

だ。こういう風変りな仕事をおつ始めたわけは、近頃の坊主どもの中には悪ごすい奴がだんだん殖えて来やがって、生活難だの復興難だのに藉しゃこう口して、仏像を売払う輩やからが多くなった。まさか本尊さまを売飛ばすわけには行かないが、それと並べてある割合立派な仏像を、いい値で売払いやがるんだ。途方もねえ坊主どもだ。そこでおれの調べたところによると、これからいう五体の仏像はとりわけ尊いものばかり、それを売り飛ばしにかかっている坊主の先廻りをして、お前にこつちへ搬はこんで貰うんだ。どじを踏むなよ、いいか」

「へえ。それは又変った仕事だねえ」

「五つの寺の所在と、さらって来る仏像の名前とスケッチは、こ

の紙に書いてある。さあ、これをそつちへ渡しとくぜ」

烏啼は懷中から書付を出して、貫一の方へ差出した。お志方が橋渡しをして、貫一へ渡ししてやった。

「ほほう。第一は目黒めぐろの応おう法ほう寺じ。酒さけ買かい。觀かん世ぜ音おん菩ぼ薩さつ木もく像ぞう一いつ体たいい。第二は品しながわ川がわの琥こはく珀じ寺じ。これは吉きつ祥しょう天てん女にょ像ぞう、第三は葛か飾つしかの輪りん廻ねじ寺じの——」

「まあ、後でゆつくり読んで、案を練るがいい。それについても一ついつて置くが、そのピストルはこつちへ預けて行け」

烏啼は、貫一のピストルを驚わしづかみにして、さつさと懷中へ収しまいこんだ。貫一はあわてた。

「じよ、冗談を。それを召上げられては、こちとらは——」

「貫一。こんどの出獄を機会に、ピストルの使用を禁ずる。それがお前の身のためだ。しかといいつけたぞ」

「そんな無茶な……あつ、兄貴」

烏啼は、つと立って奥へ入った、大狼だいろうばい狼の貫一と艶えんれい麗なるお志方をうしろに残して……

たしかな腕前

黒い森の上には戸鎌とがまのような月が懸っていた。春はどこかへ行

つちまつて、いやに冷え込む今宵だった。森をめがけて、すたすた近づいて来る一つの人影。

それがいきなり<sup>かが</sup>跼んだかと思うと、かちツとライター<sup>かが</sup>の火が光った。やがて暗闇に、煙草の赤い一つ目が現われる。

「さて、仕事前の一服と……。寺はあれだな」

と、ひとりごとをいうこの怪漢こそ、烏啼の館<sup>やかた</sup>から抜けて来た的矢貫一に違いなかった。うまそうに紫煙をすいこんでから、あたりを配り、それから手を上衣の内ポケットへ入れたと思うと、すぐ引出した手に、月があたつてきらりと光るものが握られていた。

「このピストルの方が、筋はいいんだ。何が幸いになるか分らな

いもんだ」

ちよつと片手で弄もてあそんで、するりと元のポケットへ返した。烏啼のために愛用のピストルを取上げられた貫一は今夜の仕事に、すぐどこかで新しい上等のピストルを手に入れて来たのである。

「すみません、ちよつと火をお貸しなすつて」

不意に真暗から声がして、貫一の前に一人の男がのつそりと現われた。若い男だが、毛糸で編んだ派手な太い横よこじま縞のセーターに、ズボンはチョコレート色の皮ものらしいのをはき、大きな顔の頭の上に、小さい黄いろい鳥打帽をちよこんと乗せている。

「へえ、すみません。点つきました」その男は二三遍頭を下げてから立上った。ズボンの皮が引張られるためか、変な音がした。

「旦那、どこへいらつしやるんで……」

「この先まで帰るんだが、ちよつと腰が痛くなつて一休みしているんだ」

と、貫一は出鱈目でたらめをいった。

「そうですかい。この辺は物騒ぶっそうですから、気をおつけなさい」

「お前さんは物騒でないのかい」

と貫一は、ちよつとからかった。

「とんでもない。私は刑事ですよ」

「刑事？ ははン、それはどうも……」

「じゃあ、気をつけてお出でなせえ、さようなら」

縞馬しまうまの刑事は、向こうへすたすたといつてしまった。後に貫

一は、いまいま忌々しげに舌打をした。

さあ仕事だ。今のうちに早いところ仕留めて置こうと、貫一はそれから森の中へ入っていった。

二十分ばかり経つと、森の奥から、背中にむしろ包みの秘ひぶつ仏酒買の觀世音菩薩の木像をしばりつけた貫一の姿が現われた。これは至極やさしい窃盜で得たもの、坊主たちは本堂をからにして奥へ引込んでどぶろくを沸かし、ダンス・レコードをかけてわいわいやっていた。その隙間に、至極かんたんに頂いて来たもの。

「待てッあやしい奴……」

いきなり暗闇から、月光流れる街道の真中へとび出した人影。

ばらばらとこつちへ駆けてくるところを、貫一が透すかしてみると、

何のこと、さつき名乗った縞馬の刑事野郎であつた。

無体むたいしやくに癩しやくにさわつた。背中に大きなものを背負っているから駆

け出すわけにもいかない。ぐずぐずしていりやあの若い奴に締められちまう。貫一の決心はついた。いきなりピストルを取出すと、がっちりねら覘ねらつてぶすんと一発——消音装置がしてあるから、音は低い。

きやつと、のけぞつてぶつ倒れる刑事。そのとき貫一は、はっきり見た——彼の放つた一弾は、刑事の右腕に命中し、そして二の腕あたりからもぎとつて、すつとばしてしまつたことを。

「ざまあ見やがれ。雉きじも鳴かずば撃たれめえ。腕を一本放しちまえば、あとは出血多量で極楽へ急行だよ。じゃあ刑事さん、あば

よ」

貫一は、窮きゆうくつ屈くつな恰好すてぜりふで捨台辞すてぜりふを重傷の刑事に残し、すたすたといつてしまった。

貫一は射撃に自信と誇りとを持っていたから、彼は未だ曾かつて、狙った相手に対し、二発目をぶつ放したことがなかった。一発で沢山なのである。一発でもつて、間違いなく、覘ひらつたところへ弾丸を送りこんでしまうのが自慢だったし、確かにその通りで覘ひらいが外はずれたためしがない。

彼は揚ようよう々と烏啼の館へ立ち戻った。秘仏は彼の肩から下ろされ、地下の特別倉庫へ安置せられた。

「うまくやったのう」烏啼がちよっぴり賞めた。「何か変わったこ

とはなかつたか」

「いいえ、なんにも……」

と貫一は刑事の件については語らなかつた。

油断ゆだんなき警戒

第一夜の成功に味をしめて、貫一は第二夜を迎えると、予定のとおり品川の琥珀寺へ出掛けた。

やっぱり空には戸鎌のような月が出ていて、貫一がやった昨夜

の仕事を知っているぞという風に見えた。

お寺は海端うみばたにあつた。松の木の根元で煙草を吸いつけている

と、引揚げられた舟の蔭から一人の男が立現われて、貫一に火を

貸してくれといった。その男を見て貫一は愕おどろいた。派手な毛糸を

縞に編んだセーターを着、チョコレート色のズボンをはいた男だ

つた。顔は大きく、頭の上に乗っている鳥打帽はいやに小さく、

昨夜の刑事にたいへん似ているが、真逆まさかあの刑事ではあるまい。

あの刑事なら右腕をつけ根のところから千切ちぎられて、今頃は蒼い

顔をして三途さんずの川を歩いている筈だつた。——が、それにしても、

声音こわねが似ているので、貫一はぞつとした。

刑事は、自らそれを名乗ると共に、近所が物騒なことを告げて、

向こうへ行つてしまった。昨夜と同じようだ。近頃の刑事というのは皆あんな服装をし、あんなことをいうように命令されているのだろうか。

それから二十分後に、貫一は琥珀寺の秘仏である吉祥天女像を、荒ごもに巻いて背中に背負い、寺を出た、その寺では、坊主たちが気がついて騒ぎだしたが、貫一がピストルをポケットから出すと一同は温和おとなしくなり、貫一のいうことを聞いて一同は便所の中に本当の雪隠詰せつちんづめとなった。

貫一はその後で、便所の戸を釘づけにし、そして悠々と吉祥天女像を荷造して背負つて寺を立ち出たのであった。

と、だしぬけに「待て、賊！」と声をかけて、こちらへ駆けて

来る者があつた。月明かりに見れば、又しても例の変つたユニフォームを着た刑事だつた。

銃声一発！ 刑事はこうもり蝙蝠こもりのような恰好をして道路上に倒れた

が、そのとき刑事の左腕が切断して宙にとぶのが見られた。

貫一は、そのまま走り去つた。前夜と同じことが続くとは、なかなか油断出来ない世の中になつたものだわいと、彼は烏啼の館へ帰着するまで全身の緊張を解かなかつた。

地下の倉庫には、二体の秘仏が並んだ。烏啼は、やはりちよつぴりと貫一を賞め、そして「何か変つたことはなかつたか」と訊きいた。貫一は異状なしと嘘をついた。

その次の第三夜は、葛飾へ出掛けた。

二度あることは三度あるというが、ふしぎにも同じことがあった。縞馬みみたいな刑事が煙草の火を借りに来て、この辺は物騒だから要慎ようじんするように注意して去った。

「どうも変なことがあるものだ。毎晩同じような服装をした同じような刑事が現われて来やがる。……しかしまさか同じ人間じゃあるまいな。前の夜の刑事なら、あんなにぴんぴんしてられる訳がない。それに同じ刑事なら、煙草の火を借りるにしても、もつと何か前夜と連絡のあるような文句をいう筈だが、実際はそんなことはなかったんだからなあ。だから、やっぱり別の人間に違いない」

その夜仕事が終わって寺を抜け出て通りへ出た途端とたんに、またもや

約束事のように、刑事がとび出して仏像を背負った貫一を後から呼び留めた。

「これでも喰え<sup>くら</sup>」

貫一の放った一弾は、刑事の右の脚を、膝の上のあたりで切断をしてしまった。刑事は、すってんころりと転んだが、氣丈夫な奴と見えて匍<sup>は</sup>いながら、千切れた脚をつかんで頭の上にさしあげたと思うと、ぱったり倒れて動かなくなった。——貫一は、ざまを見やがれと捨台辞を残して、その場を退散した。

烏啼の館に、尊い仏像は三体も集った。

「異ったことはなしか、今夜はいやに顔色が良くないが……」  
と烏啼が訊いたが、貫一は例によって異状なしと頑張った。

第四夜は世田谷<sup>せたがや</sup>方面だった。

さすがの貫一も、その夜は少々気味が悪くて、足がいつものように楽に進みはしなかった。

「旦那。すみません、煙草の火を貸して下さい。すみません」  
又もや同じような服装の刑事に違いない男が寄つて来た。

「君は毎晩おれのところへ火を借りに来るじゃないか」

と、貫一はもうたまらなくなつて、前後の見境もなく、そんな言葉を吐いてしまった。

「えつ、何ですつて、毎晩旦那の前に私が現われますつて。へッ、冗談じゃありませんよ、お目に懸<sup>かか</sup>るのは今夜が始めてで……」

刑事は、そういつて否定した。貫一の予期したとおりであった

ので、彼はほっとした。かの刑事が立去る後姿を、貫一は注意力を傾けて見ていたが、それは満足すべきものであった。なぜなれば、もし彼の刑事が昨夜貫一が撃つて右脚を砕いた刑事と同一人だったとしたら、どんなに幸運に考えても足をひきそうなものであったが、彼はすこしもそんな風に見えなかつたのである。もつとも、よく考えてみれば、右脚を失つた人間が、その翌晩平気な顔をして煙草の火を借りに出て来られるものか来られないものか、すぐ分ることであつた。

むとくじ 夢徳寺から みろくぼさつ 弥勒菩薩

の金像を背負つて出で来た貫一の行手に、

またもや縞馬姿の刑事が立ち塞ふさがつたのには、さすがの貫一もぞつとした。毎晩の如く現われて尽きる模様もない刑事の執しゅうねん念――

—というか、徹底した警戒ぶりに、貫一は日頃の自信が崩れ出したのを認めないわけに行かなかつた。

「よくも毎晩のように邪魔をしやがる。くそツ、これを喰え」  
ピストルは一発、発射された。

それは見事に刑事の左脚に命中し、太腿ふともものところから千切つてしまった。貫一の使っているのは特殊な破壊弾であつたから、こんな工合に恐ろしい破壊力を發揮するのであつた。

貫一は仏像を背負つたまま、今夜は倒れた刑事の方へ近づいた。月光の下に展開する凄惨せいさんな光景。

「間違いなく、左脚がちよん切れている。当人は虫の息だ。なまぐさい血の海。——あと二三分の寿じゅみょう命めいだろう。南無阿弥陀なむあみだ

仏ぶつ  
「

貫一は安心をして、その場を立った。

烏啼の館に、四体の仏像が集った。烏啼はいつもの口癖で、な  
 になかったかと訊いたが貫一はいつもの口癖で、異状なしと答  
 えた。

弥陀本願みだほんがん

いよいよ大願成就たいがんじょうじゆの第五夜となった。

今宵のお寺は、練馬ねりまの宇定寺うていじで、覗う一件は、唐の国から伝来の阿弥陀如来像あみだによらいぞうであつた。月はかなりふくらんで中天に光を放ち、どこからともなく花の香のする春の宵であつた。

またもや縞馬姿の刑事が、森蔭を出て、煙草の火を借りに来たのには愕あきくよりも呆あきれてしまつた。

「君は、たしかに毎晩出て来る男に相違ないよ。君は幽霊かい」  
「冗談じゃないですよ。私はこのとおりぴんぴん生きています」  
刑事は、貫一の前で地響しこをたてて四股を踏み、腕を曲げてみせた。なるほど幽霊ではなさそうだ。

「でも変だね。たしかに命中して腕をとばし脚を千切り……いや、これはこつちのことだが、おれはさびしいや」

「全くこの辺は物騒ですから、気をおつけなさい」

刑事が行つてしまうと、貫一は、

「おれがピストルを持ってば天下無敵だと思つていたが、その腕前ももう怪しあや気なげもんだ」と歎息した。

仏像を背負つて出て来た貫一を、やはり前四夜と同じように遠方から見咎みとがめて駆付けて来る縞馬姿の刑事！ 貫一はピストルを握つて、刑事の首に覗いをつけた。今夜は思い切つて刑事の首を飛ばしてやろうと考えたのだ。

だが彼はその寸前に思い停つて、もう一度右腕を覗つて、一発ぶつ放した。すると刑事は蝙蝠のような恰好をしてとび上つたと思つたとその場にぱったり倒れた。彼の右腕は、彼の身体から二メ

ートルも離れたところに転がっていた。

貫一は、傷つける刑事の傍に寄った。刑事は虫の息だった。貫一は、むらむらとして、ピストルを取直すと、刑事の心臓に覗いをつけた。……が、間もなく彼は周章あわててピストルを持った手をだらりと下げた。

「……おれが二発目を発射するような気になるなんて、もう焼きが廻ったんだ。ピストルも、今夜かぎり、お別れだ」

そういうと貫一は、ピストルを空高く投げた。やがて森かげの池の水が、ぽちやんと鳴って、貫一無念のピストルを呑のんだ。

五体の秘仏の前で、一心発願した的矢貫一が、お志万と結婚の

式をあげた。

烏啼も大よろこび、お志万はいうに及ばず貫一も今は万まんざら更ではない面持で、お志万の手を握って放さなかつた。

けんぞく眷族や仲間が百名ちかく集つての盛大な酒宴が開かれ、盃は新郎新婦へ矢のようにとんだ。

宴の半ばに二人連れの客が、新郎の前にぴたりと座つた。貫一はその客を見て愕いた。一人は猫背に黒眼鏡の、有名な探偵袋猫々であつたし、もう一人は縞馬服の例の刑事であつたから。

「わっはっはっ」と、貫一の横に座つていた烏啼が大きく笑つた。「貫一。このお二人さんによくお礼を申上げな。これはお前たちの大恩人だからね」

「この幽霊め、また今夜も出て来たか」

「おい、そんなことをいつてはいけない。この方は、袋猫々先生が特に探して来て下さった福の神で、実はこの方は、戦争で両腕両脚をなくされて、手足四本とも義手義足をはめられていられる方なんだ。いいかね、そこでお前は思い当ることがあるだろう」

「おお……」

「義手や義足をピストルで撃つてみても、すぐお替りかわをはめて元のようになるわけだ。もっともこの春山さんは、赤インキなども用意して実感を出して下さったようだが、とにかくお前がピストルと別れてくれたことはおれも嬉しい。今の時勢に、ピストルを振廻して人命を傷つけるなんてことは、野蛮にして下劣、最も罪

が重いんだからね」

「兄貴の智慧にしちや上出来だ」

「いや、この芝居はおれが書いたんじやなくて、ここにお出でなさる名探偵袋猫々先生にお智慧拜借の結果だよ。猫々先生によくお礼を申上げなよ。……しかしおれはお前のお蔭で、これまで下げたことのない頭を、宿敵しゆくてき猫々野郎の前に下げたんだぜ。ざまはねえや」

鳥啼はそういつて、探偵袋猫々に向つて合がっし掌しょうした。彼の両眼は義弟の更生こうせいを謝しやする涙にうるんでいた。





# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第12巻 超人間X号」三一書房

1990（平成2）年8月15日第1版第1刷発行

初出：「実話と読物」

1947（昭和22）年5月甲

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年12月29日公開

2006年8月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 奇賊悲願

烏啼天駟シリーズ・3

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>